Fragment #007

“再見！”

「あぁぁぁらぁぁぁぁぁよぉぉぉぉぉぉっとっ！」

振り下ろした巨大な金槌（かなづち）が敵の脳天にクリーンヒット。敵、人型兵器 TU が、塗料の皮膜やらボルトやら衝撃吸収剤やら潜圧流体やらその他もろもろを盛大に噴き出して、二秒の沈黙ののち、大の字に地面に倒れ伏す。

「オッケー、新型もう一機撃破っ。あたし偉いっ」

チェンファ・ザイツェン、十八歳、議会軍 TU パイロット、は、三つ目のスコアを上げた。TU パイロットになってから、でも、このニヒルバウンに来てから、でも、カウントは変わらない。初の実戦参加にして三機の敵 TU を屠ったのだ。これは偉業である。チェンファはそう思う。きっとお姉さまも褒めてくれるに違いない、と考えて、ほろりと涙が出そうになる。

DNA も戸籍もチェンファとはぜんぜん関係のない先輩 TU パイロット、リティナ・ベイロックは、救援要請を出していた隣の 12 号陣地へと援軍に向かったきり、連絡が取れない。留守番に痺れを切らしたチェンファが、味方の制止をふりはらって自分の TU に再び乗り込んだところで、ここ 9 号陣地にも敵が、条約軍の TU 部隊が押し寄せてきた。

9 号陣地の留守番は TU 三機だけだというのに、相手は一機多い、四機だった。しかも半分が新型のダル。旧来のカロには有効だった装甲切断機（ナッターシステム）が、多重装甲で幼児体型に膨れ上がったダルには、なかなか通じない。おかげでナッターを武器としていた二機の味方 TU、ツィーダは、カロをそれぞれ一機ずつ手際よく倒してくれたものの、ダル相手には防戦一方。結局、先輩パイロットたちがダルにとどめをさされそうなところを、新米のチェンファが背後から襲って救うことになった。

「うーん、このスジキーリキの威力、ハマっちゃいそう」

チェンファが部隊配属後に与えられ、訓練や後詰めでの実戦参加時に常に使ってきたのは、イブセ重工の大型 TU、マッジである。新型である。従来の主力機ツィーダよりも格段に高いパワーを持つマッジは、そのパワーを活かして巨大な金槌、スジキーリキを振り回すことができ、これが敵新型 TU ダルに対する有効打となった。

「ザイツェン伍長、怪我はないか」

見るからに中の人まで怪我をしていそうな、満身創痍のツィーダから通信。はい元気です、とチェンファは答え、彼女のマッジは足元のダルの残骸を蹴飛ばして、ツィーダに手を差し伸べる。が、それを先輩パイロットは辞退した。

「下半身のアクチュエータ出力が上がらない。こいつはもう駄目だ。残念だが、放棄するしかない」

ツィーダは腰からだくだくと血を……ではなく、駆動用の二色の潜圧流体を垂れ流している。もう一機のツィーダはというと、改めて見直すまでもなく、行動不能。なにせ上半身と下半身がお別

れしている。それでもついつい見てしまうと、パイロットが腰をさすりながら機体から這い出すところだった。しぶとい人たちだ、とチェンファは感心する。しかし、戦意は完全に挫けてしまったようだった。

「放棄って、もしかしてこの 9 号陣地もですか」

「シバ・ジン少佐とその取り巻きはとっくに逃げ出しているんだ。俺たちはよく戦ったよ。ここで犬死をすることはない。トラックはやられていないよな、あれを使おう。人質を忘れるな」

「忘れるなって……。それはあたしの台詞です。リティナお姉さまを、じゃなかった、ベイロック少尉殿をお待ちしないと！　少尉殿は言ったんです、また会いましょうって！」

「あれは少尉殿の決死のお覚悟の言葉だ。もしかすると、こうなることをあのとき見通していたのかもしれないな。とにかく、俺たちがここで帰りを待っても、ただ敵に囲まれるだけだ。少尉殿がすぐに帰ってこなかった時点で、隣の 12 号陣地に敵の手が回ったのは明らかだ。ってことはだ、ザイツェン伍長、俺が何を言っているのか、地図を見ればわかるな」

　地図が出ていないのでわからない。チェンファは地図を画面に呼び出した。最後に得られた天候と敵味方の戦力の情報を重ねて表示。幸い、チェンファにも理解できた。12 号陣地にまで条約軍が達したということは、ここ、9 号陣地は、敵に半分以上包囲されてしまっている。

「ひょえー！　これ大変じゃないですか！」

「だから逃げるって言っているんだ。奴らは第二陣を送り込んでくる、絶対にな。その前に、南に逃げる」

「でも、本陣は東ですよね、たしか」

　地図で確かめる。記憶に間違いはなかった。珍しいことに。

「いいかげん、うちにも援軍が来ていいころだ。それと合流する」

「援軍？　どこからですか」

「近場で戦力があまっているのは、フェニキア方面軍だな。だから南だ」

「え、ってことは」チェンファは興奮する。「あのヴァル・ヴァサーゴ様がいらっしゃるってことですね！　きゃー、どうしよう、お化粧してない」

「そうと決まったわけじゃないだろうに、困った娘だ。とにかく、俺は降りる。周囲の警戒を頼むぞ」

「了解であります、先輩」

　三百六十度監視開始。

　ここ 9 号陣地は、ニヒルバウン山脈の峰のひとつを仮設の拠点としたもので、要するに邪魔な木を倒して平坦な広場を作り、駐車場とテントを張るスペースを確保しただけの場所である。一応、隅に土嚢くらいは積んだものの、五十フィートを優に超える人型兵器 TU に対しては、何の足止めにもならない。そこへ守り手の TU が攻め手の TU に敗れれば陣地が失われるという、とても単純明快な陣取り合戦が、この数日にわたって繰り広げられている。

　オレンジもコーヒー豆もシイタケも、飲み食いできそうなものは何も採れないという開拓に不向きなこの山を、いったいぜんたい何のために奪い合うことになったのか。その経緯についてチェンファはよく知らない。陣地の指揮をしていたシバ・ジン少佐から説明を受けた覚えはあるものの、

少佐の話よりも彼の髪の毛――彼の頭においてはそれは稀少価値を有する――がひらひらと風にそよぐさまが面白くて、内容はなにも覚えていない。どうせ戦うことに変わりはないのだし、もしその知識が必要になってもお姉さまや先輩に聞けばいいじゃないの、というくらいの認識でいた。
――当初は。

こんなに激しい戦いになるんだったら、目的くらいきちんと聞いておいて損はなかった。今となってはチェンファもそう思う。シバ・ジン少佐よりもっと偉い司令官からは、マッジの慣熟訓練くらいのニュアンスでこのニヒルバウンに向かわされたし、自分たち以外の部隊がここへ集まることも知らなかった。――聞いていなかっただけかもしれないが。とにかく、百機以上の TU が展開する大戦闘になるとは、チェンファにとっては誤算もいいところだった。どうしてこんな土地でうら若い乙女が殺し合いに参加しなければならないのか、チェンファは文句をつけたくて仕方がない。だいたい、どうして先祖が違う星に行っていたくらいで戦争などしなければならないのか。文化は確かに違っても、相手は同じ人間、ルーツをたどれば同じ地球人なのである。数年前、戦争が小康状態のときに地球府主催の修学旅行に参加したチェンファは、統一国家連合の人間とケダブール条約機構加盟国の人間との違い、そして共通点を、肌身の経験でよく知っている。何百年も戦争を続けている指導者は、きっと子どものころに地球府の修学旅行に参加しなかったのだ、誰も。喧嘩はときどきするくらいでちょうどいい。ずっと続けるべきものじゃない。しかし、その説教を誰にすればこんな無駄な戦いが終わるのかわからない。誰に文句を言えば、お姉さまはあたしのもとに帰って来てくれるのだろう……。

リティナ・ベイロックは、チェンファがマッジとともにこの部隊へ配属となったとき、すでに優秀なツィーダ乗りとして隊内で一目を置かれる存在だった。チェンファ機に加えてもうひとつ配備されたマッジにも難なく機種転換し、次の日にはチェンファよりうまくマッジを操るようになっていた。しかし無闇に驕(おご)るようなところはなく、チェンファのような新兵に対する気配りも細やかで、そしてなにより、美しい。歳はそういくつも違わないはずなのだが、チェンファは十年経っても彼女と同じレベルには立てない気がしてならない。TU の操縦技術も顔もスタイルも化粧のセンスも物腰も言葉遣いも話題選びも言い寄ってくる男のあしらい方も――最後のはチェンファにまだその機会がないだけだが――現時点では全く及んでいない。すべての目標なのだ。リティナ・ベイロックは。そう確信して彼女をお姉さまと認定した。少尉殿もチェンファを妹のようにかわいがってくれている。――くれていた、と過去完了形になるかもしれない。この戦いが終わったらマスカヴァシティのお洒落なバーに連れて行ってもらう約束をしたのに。

「――伍長、ザイツェン伍長。おい、チェンファ・ザイツェン、聞こえていないのか」

ふと気づくと、ツィーダを降りた先輩パイロットが、整備兵や通信兵、負傷した将兵などをトラックの荷台に乗せ終えて、運転席から無線機で呼び掛けてきていた。撤退準備完了、護衛しろ、と言いたいのだ。しかし、チェンファはこの陣地を離れたくはない。お姉さまは、リティナ・ベイロック少尉殿は出撃前にこう言ったのだ。あとでまた会いましょう、と。約束したからには、彼女はきっと帰って来る。そのときチェンファがここにいなくては、チェンファが約束を違(たが)えたことになる。そんなことはできない。絶対に。

「先に行っちゃってください、先輩方」

マッジがスジキーリキを地面に突き立て、ここを動かないぞ、というアピール。
「正気か、貴様」
「本気ですとも！」
「――病気だな」
三十五歳の先輩、曹長は、溜め息をつく。そして言った。
「いいだろう、貴様はそこで敵の目を引き付けて、俺たちの撤退を支援しろ。作戦中断のタイミングは任意とする。命令は以上」
「え、なんですか、その命令？」
「そんなに少尉殿を待ちたいなら、好きにしろって言っているんだ。貴様を命令違反にはしない、ともな」
なら最初からわかるように言ってほしい、と思ったが、ここは正直に答えてはならない、とチェンファはお姉さまの教えをもとにそう判断する。
「あ、ありがとうございます！　曹長殿！」
「たまに階級で呼ぶんじゃねえや、気持ち悪い。じゃあ、俺たちは行くからな。死ぬんじゃないぞ、また会おう、だ！」
トラックは峰を下っていく。チェンファはただひとり、拓かれた峰の頂に残った。
――来るなら来なさい、条約軍。早く帰ってきて、お姉さま。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

ときどき遠くで光が見えたり、煙が立ち上ったり、およそ自然界では聞けないような音が響いてきたりする。戦場は、生きている。あちこちで戦闘が起き、どちらかが勝ち、どちらかが負け、そして移動して次の戦いが起きる。
チェンファはまだ待っていた。お姉さま、リティナ・ベイロックの帰還を。
先に脱出した先輩たちはもう安全圏に着いただろう、と安心できるだけの時間が過ぎたが、その間、稜線を越えてやって来るものは何もなかった。
9 号陣地は、敵からも味方からも忘れ去られたようだった。主戦場が移動したのかもしれないが、そもそも戦闘の目的を把握していないチェンファには、その行方を占うすべがない。音は山肌でこだましているので方向があてにならないし、煙はどっちを向いても見えている。気まぐれに現れては消える霧が、戦闘の光も隠してしまう。
待つのではなく、いっそ 12 号陣地に迎えに行こうか、とチェンファは何度か考えた。距離としては近い。12 号陣地が条約軍の拠点と化しているという可能性がなければ、実行に移していただろう。まだ陥落せず少ない戦力で耐え忍んでいるとすれば、チェンファが駆けつけるべき事態だが、動けるのならばリティナ・ベイロックはここへ一度戻ってくるだろうという期待もあった。すれ違いになるのは嫌なので、やはり、動けない。マッジの索敵・通信能力がもっと高かったらよかったのに、とチェンファは愛機の性能にケチをつける。
「まったく、このへっぽこレーダーめ！」
表示部分をこつんと小突く。すると、にわかにノイズが拡大し、見る見るうちに使い物にならな

くなる。なんらかのセーフティ機能が働いたのか、レーダー、完全に沈黙。
「え、ちょ、なに、壊れたの？　壊したの、あたし？」
　そんなわけはなかった。振動センサーが後方からの TU らしき物体の接近を感知。じっとしていなければ振動センサーは使えなかった。幸運。
　チェンファは接敵に気づかないふりをして棒立ちを維持した。背後で敵機がジャンプしたのを振動から読み取って、はじめてスジキーリキを握るマッジの腕に力を込め、振り向きざまに、三十度ほど仰角をつけて、兇悪な鉄槌(てっつい)をスイングする。視界に飛び込んでくる敵機は、青くて丸い条約軍の新型 TU、ダル。
　四つ目のスコアはそう簡単には上げられなかった。背後から飛び掛ってきたダルは、チェンファが気づいていることに気づいた。降下中に減速をかけ、スジキーリキが通過したあとを狙って、着地。至近距離。スジキーリキを振り切ったマッジは無防備な脇腹をダルの前に晒(さら)している。まずい……と、普通なら焦るべきところだったが、チェンファは思わず噴き出していた。
　——なにこのダル、変な頭。
　画面右に大写しになったダルは、さっき戦ったダルとは頭の形が違っていた。まるで大きな皿か、シャンプーハットのように膨らんでいる。新型の亜種か、どんな性能なのだろう、と考えるよりも前に、その滑稽(こっけい)な容貌がチェンファの笑いのツボを直撃していた。その結果、なんの防御もせず懐からのダルの斬撃を受けることに——ならなかった。
　頭の出っ張ったダルは、手にした斬撃武器、カムラ・ブレードで下から掬(すく)い上げるように一撃を加えようとしたが、威勢よく前に出た上体が、皿状に大きく広がった頭が、カムラ・ブレードより先にマッジの機体につっかえた。ゴチンと頭を打って、ダル、反動で後ろへ転倒。
　もう堪えることはできなかった。片手でおなかを押さえて、チェンファは笑う。コクピットシートに固定されていなければ笑い転げている。しかし実際に転げているのはダルのほうである。チャンスであると気づいたチェンファは、腹を押さえていないほうの手と足を使ってマッジを動かし、起き上がろうと足掻(あが)いているダルにスジキーリキを突きつけた。もし手を離せば、鉄槌が落ちてダルの顔面を押しつぶす仕掛け。コクピットはもっと下のほうにあるが、チェンファは視覚的圧迫を相手に与えることを無意識のうちに優先した。スジキーリキの打撃面は平坦ではない。丸くもない。ずらりと角錐が並んだ、絶対にアップでは拝みたくない形をしている。
「降参しろ、このヘンタイ野郎」
　共通周波数で送信。返事がない。
「降参しろ、このドヘンタイ野郎」
　電波と声の出力を上げ、繰り返す。そして言葉が通じていないのだと察し、地球語に置き換えて、もう一度繰り返す。
「降参しろ、この……」
「うっせー、三度も繰り返すな、このアマ」
　返信は、地球語ではなく、統一国家連合の標準語だった。ただし、訛(なま)りはある。惑星ケダバスに移住した人々の末裔(まつえい)であるのは間違いない。それから、若い男であることも。
「聞こえているんなら、さっさと返事をしなさいよ、ヘンタイくん。それか、武器を手放すとかさ」

「それだ、それ。いきなりヘンタイ呼ばわりされて混乱したんだよ。おまえは敵を見たらだれかれ構わずヘンタイ呼ばわりなのか。まったく品性のかけらも感じさせないよな、おまえ」
「レディを背後から襲うなんて、まるっきりヘンタイの手口じゃないの。ヘンタイに品性を云々されたくないわね」
「電子戦だ、電子戦。兵器の性能を最大限に利用して何が悪い」
「ああ、なるほど、それでその笑える頭なのね」
　チェンファはそのダルが普通のものに輪をかけて奇怪な頭をしているわけをようやく理解した。レーダーが突然ノイズだらけになったのは、チェンファが叩いたせいではなく、このダルの頭に搭載された ECM がレーダーを攪乱したせいだったのだ。
　チェンファ・ザイツェンは閃いた。
「ねえ、ヘンタイくん」
「ヘンタイじゃない！」ダルのパイロットは苛立たしげに遮った。「くそ、わかんないのか、このアマ。俺はケダブール条約機構軍第拾遊弋隊《明星》所属の、ビシヤ参恒だ。そっち風に言えば、ビシヤ少尉、だな。どうだ、わかったか」
「わかったか、じゃないわよ。あんた自分の立場をわきまえなさい。あんたはまず武器を捨てて、それからあたしの命令を聞かなきゃいけないの。さもないと……」
　チェンファはマッジの指の力を緩める。スジキーリキが三十センチほどずり落ちた。
「わわわわっ、わっ、やめろバカ。わかった、武装は解除する」
　ダルは左手のカムラ・ブレードを手放す。
「それでいいの。少しはお利口なようね、ビシヤ少尉」
　ビシヤ少尉、と口にしたとき、ふと、懐かしい光景がチェンファの脳裏をよぎる。が、そんなことには気を留めず、チェンファは捕虜に労働を要求した。
「その機体を使って、議会軍の TU を探しなさい。あたしと同じ TU よ。マッジっていうの」
「それくらい、知っている。ビグベンの情報収集力をなめるな。ちなみに俺のこの機体はダル電子戦強化型という名前でだな……」
　マッジがスジキーリキを少し持ち上げ、また落とす。寸止め。
「説明しろなんて言ってない」
「——こ、このアマは、あいかわらずだな……。いいか、おまえの要求に応えるだけの性能をこの機体は持っている。それを言おうとしたんだ。人の話は最後まで聞け」
「じゃあ、できるのね。よし、即時実行」
「立ち上がらなければ走査できない」
「むー」
　チェンファ、数秒間考えて、許可。ダル電子戦強化型は重い頭をふらふらさせながら立ち上がり、各部を明滅させはじめる。レーダースキャンを開始したのだとチェンファは理解した。いつでもスジキーリキでダルの胴体を叩き潰せる体勢で構えて、朗報を待つ。
「ふむ、どうもこの近辺に他のマッジは探知できないな。というか、議会軍の TU 自体、ほとんどいない。遠くへ離れていくツィーダタイプがいくつか引っかかっているが、近づいてくる機体は

ない」
　一分ほど待たせてから、ビシヤはそう結果を報告した。
「それ、本当？」
「本当だ」
「こっちからは見えないと思って、適当に嘘言ってるでしょ。待ちなさい、そっちに見に行くから」
「わわ、ちょ、待てよ。俺、フェニキアから昼夜を問わず走ってきたところだから、汗臭いんだ」
「は？　なに気にしてんの、気持ち悪っ。――やっぱり、そっちに行くのはやめた。あたしがマッジを降りた瞬間に、あんた、あたしを殺すか、逃げ出すかもしれないしね」
「お、おう、そうだ。それがいい。ちょっと待て、いま、画面をそっちの規格に合わせてエンコーダを走らせている。――よし、できたな。転送する」
　通信受け入れ。デコード。詳しい見方はチェンファにはわからないが、近くに味方が残っていないのは、確かのようだった。ツィーダと指標付けされた輝点がレンジ外へ出て行く。一方、カロとかダルとか指標の付いた輝点は、あちこちに分布している。
「ほら、よくわかっただろう。おまえは囲まれているんだ、降伏するなら、今のうちだぞ。俺がいいように取り計らってやってもいい」
「なんだか嘘くさい。このレーダー、完璧なの？」
「このあたりの樹木はレーダー波を吸収したり妙な具合に反射したりするから、どこかに隠れられていたら、探知は不可能だ。厄介な霧、スードヘイズもあるしな」
「何よ、役立たずじゃないの。あたしの仲間はちゃんといるんだもんね。あんたのバカセンサーが捉えきれてないだけよ」
「くっ、これでも画期的な索敵範囲なんだぞ。常識のない奴には、ものの良し悪しがわからんのだな、哀れな。――そうだ、哀れといえば、どうしてまだ仲間が残っているなどと信じているんだ、おまえは。こんなところにひとりで残っておいて」
「お姉さまが戻って来るって言ったからよ。だからあんたにお姉さまを探せって、言っているんでしょう？　バカね。早くしないと叩き潰しちゃうぞ」
　お姉さまの安否が気遣われてちょっと涙ぐむ。声に混じったその気配を感知したビシヤ参恒は、スジキーリキの脅迫とは別の理由で、慌てた。
「待て、泣くなよ。もう少し探してみるから。そうだ、そのために、ちょっと協力しろ」
「何よ」
「ダルをマッジの肩に乗せてくれ。高い位置からのほうが、よく探せる」
「それは道理ね」
　でも逃げられると困るから、と、チェンファは作業用のワイヤーをマッジの袖口から手繰りだすと、ダルの足に幾重にも巻いてきつく結んだ。足枷（あしかせ）。地面に放り出されていたカムラ・ブレードは踏んづけてへし折る。
　マッジの肩に飛び乗ったダル電子戦強化型は、今度は十秒もかからずに、走査を終えた。新たに幾つかの輝点が現れる。地形情報と照らし合わせると、そこは谷間や木々の深い箇所だった。しかし、マッジと断定された輝点はない。未確認、の指標はいくつかあるので、可能性は残っている。

「手当たり次第に探す」
　そうチェンファが宣言すると、マッジの肩からダルを飛び降りさせたビシヤは、明らかに辟易（へきえき）した。
「どれだけかかるんだ、それ。実は俺も急いでいるんだ。あまり悠長なことはやっていられないし、おまえだって、俺の仲間に包囲されたらおしまいなんだぜ？　そろそろ満足して、俺を解放してくれ。でなきゃ、大人しく捕虜になれ。おまえのお姉さまだって、そうなっているかもしれない」
「お姉さまは強いのよ。捕虜になんて、なっているわけがない」
　チェンファはマッジの袖から伸びるケーブルを引っ張る。足をとられたダルは、片足で跳ねてバランスをとる。
「うおっとっと……。しかしな、このままウロウロしていたら、いや、潜伏していたとしてもだ、腕前と関係なくみんなお陀仏になるかもしれないんだぞ。――ああ、くそう、言っちまった。機密なのに」
「何よそれ、どうして？」
　手繰った分のケーブルを離して、チェンファは尋ねる。いきなり張力が消えて再びよろけたダルを、なんとか直立に戻して、ビシヤは答えた。やけっぱちな声で。
「RGB 兵器だ。共振（Resonance）、重力（Gravity）、生物化学（Biochemical）の、あれだよ。おまえたち議会軍が、フェニキアからその RGB 兵器を持ち出して、ニヒルバウンに輸送した。ここでの戦いに勝つためなら手段は選ばないってわけだ。その情報をこっちの友軍に伝えるために、俺ははるばるフェニキアから、レーダー妨害にも長距離通信にも長けたこの機体で駆けつけたんだ。ま、あと一歩で味方の指揮官に会えるってところで、おまえに捕まっちまったわけだけどな。慣れない機体で欲を出すもんじゃないって、よくわかったよ」
「RGB 兵器だなんて。どうしてそんな大事なこと、早く言わなかったのよ！」
　チェンファはスジキーリキを危うく投げつけてしまうほどに興奮した。RGB 兵器は、失われた超技術で作られた禁忌の兵器として、その存在を知らぬ者はない。自分が知っているのだから、誰でも知っているだろうとチェンファは思う。どうして禁忌なのかといえば、その原理がよくわからないくせに、威力は絶大だからだ。先人たちがその使用を禁じるため敢えて原理に関する情報を封印したのだとも言われているが、結局、情報が失われて数百年が経つ今になっても、見よう見まねで作られたものや、発掘され復元されたものが、この世に多数存在する。現代史の範囲では使用の記録がないものの、いつタブーが破られても、おかしくはない。おかしくないというのは可能性を評価するうえでの表現で、使おうなどと考える奴の頭はおかしいに決まっていると、チェンファは昔から思っていた。議会軍がそれを持ち込もうとしていたとは、控え目に言っても、衝撃的な話である。そんなものを使われては、いかにお姉さまといえども、避けようがない。
「行くわよ、捕虜！」
「え、どこに？　投降の決心がついたのか」
「違うっつの。RGB 兵器を運んでくる奴らを、締め上げるのよ。友軍だって構うもんですか。あんたのその頭の皿で、位置、探せるんでしょ」
「いや、まあ、実は目星はもうつけているが、おまえ、正気か」

「本気よ！」
「短気だな、やっぱり。味方に牙を剥くなんて、あとで自分のやったことの重大さに気づいても、知らないぞ」
「なによ、知ったふうな口を利いて。頭にくる。RGB 兵器なんて使ったら、議会軍の恥よ。絶対に使わせるもんですか。——どれ、どの輝点よ！？」
「これだ」
転送画像に手書きの線が重ね書きされる。南南西の輝点に、二重丸。未確認（UNKNOWN）の表示。そうとわかれば迷うことはなかった。チェンファはスジキーリキを抱えて峰を下る。足をワイヤーで引っ張られたダルも、おのずとそれを追走するかたちになる。
「俺も物好きだよなぁ」
ビシヤの異国語の呟きが聞こえたが、チェンファは、その意味を特に深くは考えなかった。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

問題の RGB 兵器は難なく見つかった。四脚型歩行兵器ボルファントを改造したらしいキャリアに、釣鐘状の物体が載せられて、その両脇を TU が警護している。釣鐘が RGB 兵器であるのはチェンファにもすぐわかった。表面に RGB 兵器を示すマークがペイントされているので間違いない。
「あの釣鐘」
ダルに向かってそう言いかけて、チェンファは別の言葉を探す。釣鐘なんて古代のアンティークを、チェンファはたまたま知っているに過ぎない。この男にも通じる喩えをしなければならない……。
「そうだな、あの釣鐘に間違いない」
しかしビシヤにはそれで通じた。おや、とチェンファは首をかしげる。喩えが通じたのではなく、ただマークが見えただけかもしれない。そう考えて、ひとまず納得。そのはずが、何か頭の隅に引っかかる。
——そういえば、あたしはどこで釣鐘っていう言葉を覚えたのだろう。
「まあ、いいか」
ひとりごち、釣鐘を護衛する TU に注目の目を移した。機種はどちらともツィグ。TU の標準となったツィーダを突撃用に特化した新型で、ツインエジンエンジンによる高出力運転時間の延長と、瞬発力底上げが施され、両腕の大型装甲切断機グレイブナッターで強固な装甲もむりやり斬り裂く、肉食獣のような特性を持つ。マッジの装甲と構造が強固だとはいっても、あれをまともに受けては勝ち目がない。もっとも、ツィグの装甲はツィーダのそれと同レベルなので、スジキーリキを当てれば一撃で仕留められる。一方的に不利なわけではない。
「問題は、相手が二機ってことよね」
「こっちも二機じゃないか」
「あんたは捕虜でしょ、仲間じゃないの。馴れ馴れしくしないで」
「やれやれ。俺にも何かできるって言いたかったのに」

「丸腰のあんたに何も期待してない。相手は味方だし、説得してみる。わかってくれたら、戦わなくてもすむ」
「俺は、まず最初に戦うことを考えた、おまえの思考回路に賞賛を送りたいね」
　嫌味を言われたとわかったが、これは無視。
「あんたはここに居て、動かないこと。何かあったら通信で知らせて」
「共用周波数を使っているんだぞ。そっちに届く出力で発信なんかしたら、俺が見つかってツィグにやられるか、そうでなきゃ……」
「こっちへ来る。無線封鎖」
「ちょ……」
　回線遮断。
　ダルの足に繋いだケーブルは、巨木にしっかりと巻きつけてある。逃げられはしないだろう。チェンファは安心して、RGB 兵器輸送のご一行様の前に姿を現す。隊列はすぐマッジに気づき、進行を停止した。
「そこのツィグ！」
　マッジの人差し指でツィグの片方を指し、次に釣鐘、RGB 兵器を指示する。
「それは RGB 兵器とお見受けしますが、いったいどういう理由で戦場にそんなものを運び込んでいるのですか」
　指差したのとは別のほうのツィグが、腕のグレイブナッターを収納状態から展開状態へと移す。が、それをもう一機のツィグが制止した。そして、言う。
「まず自分の名を名乗るのが礼儀ではないかな、レディ」
　――レディだって。
　実際人から言われてみると、体ののあちこちが痒い。顔が歪みそうになるのをこらえて、返信。
「第 22 山岳師団第 54TU 大隊の、チェンファ・ザイツェン伍長です」
「我々はフェニキア方面軍第 3 要塞師団レライエ中将麾下、パトリキ隊だ。私は隊長のバレイシオ・ジャグタール少尉」
　所属説明の間がずいぶん抜けたな、ということと、フェニキア方面軍に典型的な貴族のボンボンだな、ということだけ覚えて、チェンファは頷く。レライエ中将なる人物が実在するのかどうか、どうせ、知らない。受信は音声のみの通信だが、送信は動画でやっているので、頷いた様子は相手に伝わっているはずだった。それに気をよくしたのか、今にも噛みそうだったバレイシオは徐々に流暢さを取り戻して先を続ける。
「この戦略物資は、ニヒルバウンでの戦いを勝利に導くため、フェニキアから輸送してきたものだ。命令は中央司令部からフェニキア方面軍司令閣下へと秘密裡に下されたが、正式なものだ。時がくれば公開される。我々パトリキ隊は、レライエ中将よりその実行役を仰せつかり、ここに至った。正当な命令に基づく、なんら間違いのない作戦行動だ」
「あたしは、誰に言われたのかじゃなくて、それを運んで来た理由を聞いているんですけど」
　チェンファが文句を言うと、バレイシオは準備していた言葉を失ったらしく、やや沈黙があった。
「――それは、命令されたからだ。命令に従うのは軍人の務め。責務を果たすは貴族のさだめ。実

行内容がわかっていれば、理由を知る必要はない」
「あんた、それ何だかわかって言ってんの？　RGB 兵器よ。そんなもの使ったら、この戦場の人、みんな死んじゃうじゃない。あんただってそうよ、命令されたからって死ぬの？」
　チェンファは思わず敬語など忘れて怒鳴っている。ツィグの片方がグレイブナッターを前に構えて威嚇する。が、バレイシオはあくまでそれを制止した。
「ぶ、無礼は許そう。君は取り乱しているな。安心しろ、これは RGB 兵器とはいっても、破壊力を限定したものだ。広域地下共振爆弾。敵兵の殺傷ではなく、この戦いの目的である地下資源の埋蔵場所特定を行うものだ」
「地下資源なんて話、いま初めて聞いたわよ。どうせ嘘ね。その釣鐘だって、本当はすごい威力の爆弾に決まっているんだから。あたしは地球府の資料館で見たことがあるのよ、大昔、帰還暦百年とか二百年のころに RGB 兵器を投下した輸送機パイロットの証言を。そのパイロットはね、自分の輸送機に積み込まれたカプセルを、降伏勧告のビラを詰めたものだって教えられていた。それをそのとおり信じていた。だから、早く相手が降参してくれれば殺し合いも終わるなって思って、喜んで輸送機を飛ばした。そして、街をひとつ、地図上から消し去った。——あんたはそのかわいそうなパイロットと同じなのよ。わかる？」
　ははん、とバレイシオは嘲笑した。
「君は、地球府の修学旅行に参加したんだな。ふむ。戦争を迷惑がっている地球府が、やってくる各国の若者たちにでっち上げの話をして、厭戦ムードを作ろうとしているという噂は、人から聞いたことがあったが……。偏った情報だけ与えられると君のようになるわけだ」
「ええい、もう、これだから頭の固い貴族のバカ息子は」
　チェンファはマッジにスジキーリキを構えさせた。
「バカがバカなことをしでかすまえに、力ずくでやめさせてやるわよ」
「バ、バカだと？　このジャグタール家嫡男のバレイシオに向かって、バカといったな、庶民の娘が！」
「やめろ、バレイシオ」
　立場逆転で、さっきまで襲ってくる気満々だったツィグが、制止役に回る。しかしバレイシオはその腕を振り払った。
「止めるな、ジョルジュ。私は侮辱されたのだ。決闘だ！」
「決闘は貴族同士でやるものだろう、バレイシオ。ああ、もう、聞こえていないな。——おい、ミス・ザイツェンと言ったか。今なら間に合う、謝っておけ。フェニキア貴族はバカ呼ばわりされるのを一際嫌うんだ」
「バカ言わないで。バカにはバカと教えてあげたほうが本人のためよ。決闘？　いいでしょう、このチェンファ様が受けて立ちますとも、バカ貴族のお坊ちゃん」
「くっ、正気か」
「本気よ！」
「勝気な娘だ。おい、バレイシオ、やめておけっていうのがわからないのか。任務中だぞ」
「決闘成立だ」

再三押さえ込みにかかったジョルジュのツィグを完全に押しのけ、バレイシオのツィグは両腕のグレイブナッターを展開。胴体から背中へ伸びる排気筒、エジンマフラーからもくもくと煙を吐く。臨戦態勢。

「ジョルジュ、立会人は任せるぞ。未来のジーネン卿ならば不足はない。ただし、間違っても手出しはするなよ」

「侮辱するなよ、バレイシオ。立会人の心得くらい、わかっている」

ふたりのフェニキア貴族はなんだかんだで決闘の手続きを開始。チェンファは貴族の作法などさっぱり知らなかったが、ジョルジュ・ジーネンの言うとおりに復唱していると、それで手続きは完了したらしい。チェンファのマッジとバレイシオのツィグのちょうど中間に立ったジョルジュ機が、腕を振り上げる。それが会戦の合図だった。

「交戦開始（エンゲージ）！」

「いざ尋常に勝負！」

正面から衝突するマッジとツィグ。速力の違いから、会合点は中間点よりもだいぶマッジ側に寄った。チェンファは慌ててスジキーリキを上から振り下ろしたが、それでも、ツィグの突進力をまだ甘く見ていた。鉄槌が頭上にあるうちにマッジに肉迫したツィグは、スジキーリキの柄をたやすく切断。もう片腕のグレイブナッターで肩の関節を狙ってくる。

チェンファは機体を傾（かし）がせ、斬撃を装甲部分で受けた。反撃。食い込んだ刃の根元、ツィグの肘あたりを掴（つか）み、そのまま握りつぶす。ツィグの左腕が妙な方向へ曲がった。直後、前から後ろへと走る衝撃がコクピットを揺るがす。ツィグが残った右腕のグレイブナッターで胸部を斬りつけはじめたのだった。

「えーい、これでどうよ」

マッジの体格を武器に、押し倒しにかかった。ツィグはたまらずのけぞったが、そこで背中のエジンマフラーがいっそう大量の煙を噴き、驚くほどのパワーを出して踏みとどまる。それならばと、チェンファはチョップを繰り出して、肩口のエジンマフラーを叩き潰す。排気不良で出力を落とされたツィグは徐々に押されていき、ついに倒れるかに見えた。

しかし、バレイシオはしぶとかった。片足だけ力を抜き、のしかかるマッジの重量を横に受け流して、自分は下敷きになるのを避ける。チェンファのマッジは半回転し、仰向けになって倒れた。

「ふふふ、これで抵抗できまい！」

ツィグはマッジの上に馬乗りになると、左腕のグレイブナッターを振り上げ、高周波振動の刃を顕示する。その姿に、チェンファは生理的悪寒を覚えた。奥の手、発動。

「わーっ、ヘンタイ！　死んじゃえー！」

マッジの両腕の、側面一次装甲版と二次装甲版の隙間から、五本の棘（とげ）が伸び出る。本来登攀（とうはん）用のアイゼンとして山岳師団向けのマッジに装備されたものだが、隠し武器にもなるからと、普段は表に出さないよう指示されていた。それを使った。もくろみは成功だった。チェンファが釘バットと化したマッジの腕を振り回すと、不意を衝（つ）かれたツィグはその五本と五本、計十本の棘によってあちこち突き刺され、グレイブナッターも側面に穴を開けられて、折れる。そして最後に、顔面に釘バットが叩き込まれた。

ツィグ、ノックアウト。
「そこまで！」
誰かの叫び声が、チェンファに落ち着きを取り戻させる。ぼろぼろになったツィグに気づき、それを押しのけて、マッジの機体を起こす。
「あたしが勝った。約束どおり、その RGB 兵器は壊させてもらうね」
「そんな約束はしていなかったと思うけどな、チェンファ？」
「え！？」
予想外の声がしたことに驚いて、立会人、ジョルジュの存在をふりむいて確かめる。いない。
——いや、いた。ジョルジュのツィグは、どうしたことか仰向けに倒れていた。誰がやったのか、チェンファにはひとつしか解答案が思い浮かばない。
「あんたがやったのね、ビシヤ・トバツ！」
ボルファント改造のキャリアを拿捕(だほ)し、RGB 兵器を支配下に置いたダル電子戦強化型が、彼女の視線の先に立っていた。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

「ようやく思い出してくれたか」
ビシヤ・トバツは感慨深げに言った。が、チェンファ・ザイツェンは、どうして教えられていない下の名——彼にとっては家名ではなく個人名にあたる——を自分が口に出せたのか、わけがわからない。わからないのはどうやって足枷を外したかという点も同じだったが、こちらはすぐに答えが見つかった。ダルは、出っ張った頭の裏側に半円状の武器を隠していたのだ。その刃物が、今、ダルの手にある。
「えっと、ごめん、思い出せないんだけど」
「な、なんだと……。俺は声だけでわかったっていうのに……」
トバツは相当のショックを受けた様子だった。しかし、思い出せないものは、思い出せない。
「ヒント。なにかヒントをちょうだいよ」
「なら、これでどうだ！」
ダルからの送信が動画モードに変更される。受信。通信用モニタに相手の顔が出た。整った顎(あご)に、細い眉、しかしちょっと円らな目。そこそこいい男だとチェンファは評点した。そして、どうやら、いつかどこかで見たような気がしてくる。ただ、記憶から浮かび上がってくるイメージは、もう少し丸みを帯びた顔だった。
「——ごめん。もう一個ヒント！」
「あいかわらず記憶力がショボいんだな、おまえ……。いいだろう。さっきおまえ、そこのヘンタイ貴族を相手に、RGB 兵器を投下したパイロットの話をしていただろう」
「ヘンタイじゃない！」
と、バレイシオの声。
「うるさいっ。人の話しは最後まで聞け！」
チェンファは裏拳をかましてツィグを再びノックアウト。バレイシオは気絶したらしく、静かに

なる。それを待って、トバツは語りを再開した。
「おまえが見たという記録映像は、帰還暦一八八年、議会軍が特級指定の RGB 兵器、歪(わい)重力圧壊爆弾を使用した歴史的事実をふりかえったものだ。捏造(ねつぞう)した話じゃない。地球府だけではなく、こちら側の国々では、ちゃんと教えていることだ。統一国家連合としては歴史の汚点。教えていないのも当然といったところだな」
「よく、それだとわかったわね」
「俺も同じビデオを見ているんだ。証明して見せようか？　標的となったのは、マスカウ共和国の首都、マスカヴァシティだ。現在のマスカヴァシティは、マスカウ共和国が統一国家連合に編入されたのち近くに再建されたもので、もともとのマスカヴァシティは、内海の底にある。――どうだ、おまえの見た内容と、同じだろう？」
　チェンファは唇の下に指を当てて、記憶をたどる。すべて断線。
「うん、覚えてないから、わからない。でも、あのマスカヴァシティが複製だとはね。勉強になるわー」
　と、言ったとき、チェンファは既視感(デジャヴ)を覚える。勉強になるわ。そう、昔も言ったのだ。たぶん、相手はこの男、いや、当時は少年だった、ビシヤ・トバツ。資料館を一緒に廻(まわ)っていて、RGB 兵器のケーシングの実物大模型を前にしたとき、少年は教えてくれた。少し訛った調子で。
　――こういう形、ツリガネって言うんだぜ。
「あああああああああああああああ！」
　思い出した。ビシヤ・トバツ。地球府の修学旅行で一緒だった、移動のエアロトレインでもたまたま何度か隣になって話をした、ビシヤ・トバツだ。どうも変な名前と服装だと思ったら、ケダバス人だったのか、とチェンファは数年越しに納得する。あれは六年前のことだった。当時のチェンファは十二歳、たしかトバツも同じ歳だった。なんと十八で士官とは生意気な、とチェンファは妬(ねた)む。あの不器用な少年が。
　――いや、それどころではなかった。
「トバツ！　あのトバツ少年ならどうして、今そこで RGB 兵器を奪おうとしているのよ。資料館で一緒に RGB 兵器の恐ろしさを学んだでしょ？」
「何を怒っているんだ、チェンファ。ま、君はあのころから怒りっぽい少女だったが。――俺がこれを、君と協力して廃棄するために、腐れた議会軍の奴らから奪おうとしているのがわからないのか」
「そんなの、嘘でしょ」
「どうしてそう思うんだ」
「だって」チェンファはマッジでダルの背後を指差す。「あんたのお仲間がいっぱい来ているもの」
　やや高いところから、五機のカロが見下ろしている。見えるまで気がつかなかったのは、レーダーがジャミングされていたせいだ。この強力なジャミングの犯人は、目の前のダル電子戦強化型以外にない。
「ち、まだ出てくるなと言っておいたのに……。チェンファ・ザイツェン、聞いてくれ、俺が RGB 兵器を密かに処分したいというのは本当だ」

トバツのダルはマッジとの距離を数歩縮めて、両手を広げた。裁判で容疑を否認する被告人をチェンファは連想する。

「それとそこのカロ軍団と、どう関わりがあるのよ」

被告人を追い詰める検事になった気分で、チェンファ。

「君は議会軍の将校を倒してしまったじゃないか。この広域地下共振爆弾――本当かどうかはケーシングを開けてみないとわからないが――とにかくこれを捨てるのはいいが、そのあと、君は逮捕されてしまう。すべての証拠を湮滅（いんめつ）するというなら手伝うが、しかし、虫食いの記録では君の上官は納得しないだろう」

チェンファは唸（うな）った。シバ・ジン少佐は疑ってかかるに決まっている。記録の空白の時間、どこで何をしていたのかと。マッジのこの傷は、グレイブナッターで切り裂かれたように見えるが、どういうことなのかと。ねちねちと問い詰めてくるに違いない。密室で。あの脂っこい手で、お尻を触られるかもしれない。ぞっとする。

「でも、これは決闘よ。バレイシオなんとかかんとか少尉が証言してくれるし、ほら、立会人だって」

チェンファがその思いつきをダメだな、と悟ったのと同時に、トバツに「バカだな」と指摘されている。

「そいつらは貴族で、君はそうじゃない。庶民が貴族と決闘をやるのがまず異例だし、それで庶民が勝っただなんて、そう正直に証言して得をする貴族なんていない。錯乱したマッジのパイロットが問答無用で襲ってきた、とか、チェンファ・ザイツェンは条約軍のスパイだった、とでも話を作るだろう。彼らにとっては証拠の湮滅くらい簡単なことだ」

「むむむむー。絶体絶命じゃないの、あたし」

「そうでもないさ。嘘を真実に変えればいい」

「あたしは正気だ！　錯乱なんかしてない」

チェンファが憤慨すると、トバツは嘆息した。

「どうしてそっちになるんだ……。だから、俺と一緒に来ればいい、と言っているんだ、チェンファ。俺は栄誉ある第拾遊弋隊《明星》の戦士だ。義憤により我らに味方した敵軍兵士を迎え入れるくらいのはたらきかけは、できる立場にいる。俺の上官のクリフ弐河（にか）も口添えしてくださるだろう。あの方は年寄りと淑女（レディ）には特にお優しいからな。おまえも淑女の端くれだ、心配することはない。さあ、こっちへ来い、チェンファ」

揺るがず佇立（ちょりつ）するマッジの操縦席で、チェンファの心は揺れていた。受け入れてもらえるとはいっても、ろくに言葉も通じぬ敵国へ行くことに、抵抗はある。しかし、修学旅行の間ずっとそばにいた――いや、たぶんつきまとっていた――ビシヤ・トバツのことは、嫌いではなかった、と思う。思い出せる限りは。

チェンファは迷い、長い沈黙が流れた。

戦場はずいぶん静かになっていた。じっとしていると、鳥たちのさえずりさえ聞こえてきそうだったが、それはなかった。空に鳥の姿はない。戦いの気配を感じてとっくにどこかへ行ってしまった。空を漂うのは戦の煙だけ。

その灰色の煙のなかに、鏑矢（かぶらや）のごとく音を立てて、鮮やかな煙の筋が加わった。議会軍の信号弾。三色の組み合わせで意味が変わるその信号の内容を、チェンファは作戦実施要領を参照して確かめる。

――全軍撤退せよ。

もう、味方の救援は望めない。ここは彼の好意に甘えて、一時的に敵国へ渡るのも手かもしれない、と考える。そう、あくまで一時的に。戦争が終わり、議会軍が RGB 兵器を使おうとした非道の事実が明るみに出れば、今日ここでやったことの弁解はできる。何年先のことか、まだわからない。しかし、家族や友人たちとは、また会えるのだ。

――また会いましょう、チェンファ。

「だめよ！」

チェンファは叫んでいた。

「あたしはお姉さまと約束したもの。また会いましょうって。ここで！　あんたについて行ったら、その約束を果たせなくなる！」

「そんなに大事か、お姉さまが。投獄されるぞ」

牢屋に囚われるのは嫌だった。しかし、ここでトバツについて行けば、裏切りの罪悪感――ほかでもないお姉さまを裏切ってしまった罪悪感に囚われて生きることになるだろう。チェンファは、それには耐えられそうにない。

「お姉さまを探して。リティナ・ベイロック少尉を。お姉さまと一緒なら、行ってあげてもいい」

「君はあいかわらず強情だよ、チェンファ。おかげで、タイムアップだ」

ダルが広げていた手を戦闘態勢に戻す。うしろのカロたちも身構えた。背後にレーダー反応。TU が一機。IFF による判別は、友軍機、マッジ。機体登録コードは見覚えがある。自分のコードすらうろ覚えのチェンファは、しかし、その機体のコードだけはしっかりと覚えていた。

「お姉さま！」

「――あら、ノイズばかりだったのに。この声、チェンチェンね？」

チェンファの敬愛するお姉さま、リティナ・ベイロックが、全身切り傷だらけのマッジとともに現れた。

「お姉さま、本当にお姉さま！　無事でよかった！」

「無事じゃないわぁ、もう。12 号陣地の生き残りを南に逃がそうとしたら、ドゥプラとかいう物分かりの悪い男が徹底抗戦だとか喚（わめ）いてね。素直に逃げようとする部下と喧嘩まで始めるもんだから、仲裁やら護衛やらでもう、くたくたよ。――って、なに、チェンチェンもピンチみたいじゃない？　TU が六機だなんて、デザートにしてはボリュームありすぎよ。今日はもう五機、平らげたんだから。体重増えちゃう」

リティナのマッジの足取りは、しっかりとしている。傷は装甲だけで、内部には達していないようだった。必殺武器のスジキーリキも健在。彼女はまだ戦える。

「交渉は決裂か」

トバツは残念そうに言いながら、手で何かの合図をした。それを受けて、後方に控えていたカロ

たちが一斉にジャンプし、ダルの前に着地、壁を作る。
「どうもそうみたい。――お姉さま、RGB 兵器を敵が奪おうとしています。まとめてぶっ壊しましょう」
「ええ、いいわよ。腕が鳴るわ」
「交戦開始（エンゲージ）！」
　チェンファは叫んだ。
「合戦開始（エンカウンター）！」
　トバツも宣言する。
　二対六。条約軍の TU たちは半包囲陣形を取った。ただし、ダルだけは下がる。釣鐘を載せたボルファントを刃物で脅して連れて行く。
「逃げるか、この野郎」
　チェンファは腕の棘を正面に向けて、突進する。その隣を付かず離れず、リティナのマッジが、スジキーリキを構えて疾走。
　ダルへの進路上にいた二機のカロは、盾を装備していた。マッジが近づいてくると、盾を構えて後ろへ跳び退（すさ）り、間合いを保つ。その距離を縮めようとさらに前進するチェンファの背後へ、横合いからカロが近寄り、それをリティナがスジキーリキで追い払う。するとそのリティナの背後へまた別のカロが襲いかかり、一撃を加えると、欲は出さずに距離を取る。
　ふたりは、完全に前進を阻まれた。背中を向け合って、死角をなくす。しかし、これではジリ貧だった。
「この子たち、ちょっと手ごわいわ」
「やっぱりそう思いますか、お姉さま。遊弋隊だって、言ってました……」
「あら、まあ。それはたいそうなおもてなしね。――でも」
　勝利の女神はふたりを見放していなかった。カロたちの背後で、むっくりと起き上がる、ツィグ。胸部装甲とエジンマフラーがぽっこりと凹（へこ）んでいるが、細かい穴は開いていない。バレイシオではなく、ジョルジュの機体。トバツにやられたはずの。そうではなかったのだと、チェンファは気づいた。あの胸部の凹み具合は、トバツがこっそり忍び寄って斬り伏せたのではなく、もっと大質量の何かが、鈍器が、衝突した痕（あと）だとわかった。ちょうどいい大きさの物体に、チェンファは心当たりがある。スジキーリキの先端。バレイシオのツィグに振り下ろそうとして、柄を切断されてしまった、あのスジキーリキの先端に違いなかった。慣性でそのまま飛んで行った鉄塊を、ぼうっと立っていたジョルジュは、よけきれなかったのだ。なんと運の悪く、そして、バカな貴族だろう。
「隙ありっ！」
　バカなジョルジュは、しかし全く無能というわけではなかった。ジョルジュの駆るツィグはグレイブナッターを閃かせ、高速で振動するノコギリ状の刃で、カロの背中を袈裟（けさ）斬りにする。カロは直前で気づいて逃げようとしたが、巨大な刃から逃れることはできず、膝をついて倒れる。
　相手の陣形に乱れができた瞬間を、リティナ・ベイロックは見逃さなかった。自分の正面にいたカロへと直進し、スジキーリキを両手で振り下ろす。下がってこれをよけるカロ。しかし彼女の攻撃は終わってはいなかった。地面にめり込んだスジキーリキを支点にして、マッジの巨体が倒立。

そのままカロへ踵落(かかと)としの追撃を繰り出す。遊弋隊のカロはこれを再びかわしたが、そのとき、横に回避する余裕がなかったのが敗因だった。再び大地に足をつけて立ったマッジは、スジキーリキを背中のほうから頭上、そしてカロの顔面へときれいな円弧軌跡でもって振り下ろす。カロの青いゴーグル状のセンサーカバーが衝撃で吹き飛び、その下の光学素子が露出したが、それはもう原型の類推が難しいほどぺしゃんこに潰されていた。

チェンファも負けじと手近のカロに体当たりし、腕の釘を突き刺したが、それは盾によって受け止められていた。そして、抜けなくなっていた。釘付けにしたのか、されているのか、これではわからない。体格差で押し倒そうともしたものの、いつもの力が出ない。チェンファがマッジの自己診断表示に目をやると、バレイシオとの戦いで傷を受けたせいか、下半身へ送られる潜圧流体が、所定の圧力を下回っている。これでは勝てない。

首を巡らすと、リティナもジョルジュも、二機目を相手にてこずっていた。どちらも機体が万全ではないし、相手は噂に違わぬ熟練の遊弋隊。彼らは TU の特徴を掴んで戦っている。マッジに対しては、スジキーリキを振るうと機体のバランスを取り戻すのに時間がかかるのを知っていて、その隙に後ろへ回り込み、また、頭の位置が高いのを逆手にとって、身を低くして視界から逃れている。一方ツィグに対しては、エジンマフラーを集中的に狙い、ツィグ自慢のツインエジンエンジンに熱暴走を起こさせようとしていた。

その間に、トバツのダルと、RGB 兵器を載せたボルファントは、着実に遠ざかっていく。ボルファントの歩みが遅いのでまだ目視範囲なのだが、残る三機のカロを振り切れなければ、とても追いつけない距離だった。しかも、先に倒した二機のカロも、完全に破壊したわけではないので、いつ戦線復帰してくるかわからない。状況は極めて不利だった。

「うおおおおおおお」

突如、誰かの雄叫びがチェンファの鼓膜を襲った。後方から急速接近するのは味方機、ツィグ。バレイシオ・ジャグタール少尉。

チェンファは盾を挟んで押し合い圧(へ)し合いしていたカロに、わざと勝ちを譲る。右足を引いて、半ば回転しつつ後退。踏みとどまるパワーが出ず、そのまま押し倒されそうになるが、そこはなんとか間に合ってくれた。フェニキア貴族のボンボンが。

「レディを押し倒そうとはこの不埒(ふらち)者めがっ！」

両腕の武器をチェンファとの決闘で失ったバレイシオ機は、カロの脇腹めがけて、ドロップキックを炸裂させた。助走が半端(はんぱ)でないだけに、威力も大きい。カロは突き飛ばされ、転んで、地面を抉(えぐ)りながら、二百フィートほど転がって巨木に衝突。マッジの腕には、カロが手放した盾が、棘に突き刺さったまま残された。

「RGB 兵器を取り戻すのだ、ザイツェン伍長。——いや、破壊しろ」

百フィート転がって果てているツィグから、バレイシオが命じる。本気だな、とチェンファは感じ取った。頭を打って、正気ではないかもしれないが。

リティナとジョルジュの脇を駆け抜け、チェンファはダルを、トバツを目指した。腕の棘にくっついた盾はそのままに。それは登攀用の棘よりも強力な武器になった。盾の一角には鋭い刃が備

わっていた。
「ビシヤ・トバツ！」
　ボルファントの歩みに合わせていたダルは、よけることもできず、脅しに使っていた刃をチェンファへと向けて身構えた。
「甘いってのよ」
　弱点はわかっている。頭上だ。そこにはセンサーはあっても、刃も盾もない。チェンファはアクチュエータのリミッターを解除。一時的にもとの脚力を取り戻して、ジャンプ。見下ろされたトバツに、勝ち目はない。
　カロの盾が、その鋭い刃が、チェンファの狙い通りに目標に突き刺さった。着地の衝撃を受けて、刃自体も砕けたが、亀裂を作った段階で刃の役目は終わっていた。あとは運動エネルギーが、硬い被覆を失った本体を芯まで破壊してくれた。
　釣鐘は、割れた。
「やったな、チェンファ。俺の手柄がこれでパーだ」
　マッジに頭上を取られた直後、迷わず回避に転じていたトバツのダルは、RGB 兵器とは対照的に無傷である。盛大な唐竹割りを終えて息の切れたマッジに歩み寄ると、さんざん傷のついた胸部装甲、コクピットの前に、刃を突きつけた。
「最後にもう一度言う。チェンファ、俺と来い」
　通信モニタに映るトバツの顔は真剣だった。チェンファも真剣に答える。背後を振り返って、相談する必要は、感じなかった。
「行かない。その釣鐘をすぐに叩き割らなかったあんたとは、一緒には行けない」
「正気、だろうな」
「ええ、本気」
「そっか。元気でな。——ザイツェン！」
　ダルは刃物を頭の後ろにしまい、大きくジャンプで後退。同時に上げた信号弾に従ったものか、カロたちもすばやく撤退していく。その数、五。背中に大きな切り傷を負った機体も、頭を潰された機体も、仲間に庇(かば)われながらも自力で動いていた。
　マッジで追うのは、不可能だし、チェンファはそうしようとも思わなかった。昔から、トバツのほうがつきまとってきたのだ。自分から追うことはない。
「チェンチェン、大丈夫？」
「よくやった、ザイツェン伍長」
　リティナが、ジョルジュが、ぼろぼろの機体で駆け寄ってくる。
「平気です」
　明るく答えたチェンファだったが、すぐに彼女のマッジは立っていられなくなり、地面に膝をつく。リミッターを解除すると、潜圧流体が不可逆変化を起こすので、こうなる。普通は使ってはならない、奥の手中の奥の手だった。
「うおおお、私は感動したぞ！」
　と、頭を打ったらしいバレイシオが復活。

「己の信念を曲げない芯の強さ、そして身を挺した戦いぶり、見事だったぞ、ザイツェン伍長。平民にしておくには惜しいっ。惜しすぎるっ。――ん、ザイツェン。その名は、よくよく思い出せばゲルマンの旧き家名であったような気もするな。今の紳士録には載っていないが……。君は、実は高貴な血筋の者ではないか？　事情があって爵位を返上したとか、そういう過去があるだろう。そんな気がしてきた。私が父に言って、君の家の再興をはたらきかけてみようじゃないか。父は子爵なんだ。そこのジョルジュの父君も辺境伯だし、他にも高貴な友人はたくさんいる。レライエ中将にお頼み申し上げるのもいいかもしれないな……。さあ、ザイツェン伍長。言ってみたまえ、君の一族の悲しい過去を。貴族選抜隊である我々パトリキ隊は、いつでも君を受け入れる用意がある！　薔薇色の未来が君を待っているぞ！」

「いや、ぜんぜん関係ないし、興味ないですから、とりあえず寝ててください」

「なんと謙虚な！　ますます気に入ったぞ、ザイツェン伍長！　――と、おい、こらジョルジュ、何をする」

　ジョルジュ・ジーネンが無言でバレイシオを TU から引っ張り出しにかかった。もうあのツィグは動けない。現実的な処置だった。

「さて、わたしたちも退散するとしましょうか、チェンチェン。こっちのコクピットに乗せてあげるわ、おいでなさい」

　差し出されたマッジの手に、歪んだハッチをこじ開けて、飛び移る。コクピットに入ると、リティナの、お姉さまの匂いが胸いっぱいに広がった。

「ちょっととばすわね。全軍撤退命令は出ているし、RGB 兵器も持ち込まれているとなると、のんびりはしていられないもの」

　それを聞いたチェンファは、お姉さまの膝の上で、背中に羨ましい胸のボリュームを感じながら、ふりかえって訊ねる。

「どうしてですか？　RGB 兵器は、あたしがたしかに破壊しました。もう、どこでリモコンのボタンを押したって、作動しないと思うんですけど」

「あのね、何かをあてにするなら、必ず予備まで用意するのが大人ってものよ。将軍や政治家たちが RGB 兵器を使うと決めたなら、運び込まれたのはあれひとつではないはず。こんなところにいたら命がいくつあっても足りないわ」

「そんな……」

「心配？」

「いえ、先輩たちは、もう安全圏に脱出したはずです。9 号陣地は、あたしが守り抜きましたから。褒めてください、お姉さま」

「えらいえらい」

　リティナは片手を操縦桿から離して、チェンファの髪を優しく撫でる。

「でも、わたしが聞いたのは大隊の仲間のことじゃないの。心配なんでしょ？　さっきのボ・ウ・ヤ！」

「きゃーっ、き、聞いてたんですか、お姉さま！？」

チェンファは耳を塞いで絶叫する。
「だって共用周波数だもの。ノイズはあったけど、途中からは丸聞こえだったわよー？　いいわねー、敵味方に別れてのロマンスって。チェンチェンもなかなかやるのね」
「そういうんじゃありません！　心配だなんて！」
チェンファが身を捩って暴れるせいで、マッジの走行姿勢が揺らいだ。リティナは慌ててチェンファを落ち着かせる。
「もう、答えはわかったから、言葉にしなくてもいいわ。でも、もうひとつ聞きたいことがあるんだけど。さっきのあれ、どういう意味？」
「あれ、ですか？」
動きを止めて、首をかしげるチェンファ。
「チェンチェンのこと、最後だけザイツェンって呼んだじゃない。あれは、どうして？　そういう文化？」
「あ、あれですか」
チェンファはリティナが気に留めたトバツの発言を思い出す。
――元気でな、ザイツェン！
そういえば六年前もその言葉で別れたのだった。
「ふふ、秘密です。ゲルマン貴族と関係ないのだけは明言しておきますけど」
お姉さまはなかなか許さずに何度もチェンファをこしょぐったが、彼女は最後まで負けなかった。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

その日、ニヒルバウンの戦いは終結した。両軍がニヒルバウンから兵を引いたことだけは確かなのだが、地下資源とやらがどうなったのかは、よくわからない。壮大な TU 性能品評会だったのかもしれない、と指摘する者すら現れたほどに。
RGB 兵器は結局、ひとつも使われなかった。公式発表ではそういうことになっている。条約軍側の発表にもその点に違いはない。チェンファが耳にした話では、あの釣鐘をフェニキアから持ち出したのも、パトリキ隊ではなく、どこかの全滅した部隊が独断でやったという筋書きになっていた。死人に鞭(むち)は打たないという議会軍の伝統的方針に則(のっと)り、誰も厳しい処罰は受けなかった。
一方で、多数の将兵の表彰が後日行われた。
チェンファ・ザイツェンは、リティナ・ベイロックとともに、新型 TU マッジで多大なる功績を挙げた者としてメダルを授与されることになった。読み上げられた表彰文には、RGB 兵器に関する記述はない。また、受賞者はあと二人いるが、サングリエ・ボアケット中尉に、アモン・ダイドウ大尉と、いずれも士官である。並んでみてわかるが、いずれも経験を積んだ TU パイロットで、チェンファとは違う。表彰者用の席にパトリキ隊の姿はなく、参列のなかにも見当たらないが、頭を打ったバレイシオが何事かはたらきかけてチェンファが受賞に至ったことは、想像に難(かた)くなかった。
「チェンファ・ザイツェン伍長」

司会に名を呼ばれて、チェンファはメダルを受け取るために前へ出る。メダルを首にかけてくれるのは、TU を実戦兵器として定着させた議会軍の英雄、ヴァル・ヴァサーゴ大佐。人並みにヴァサーゴ大佐への憧れを抱いていたチェンファだったが、間近で見ると、顎はちょっと割れているし、帽子の上からサングラスを重ねてつけたその姿は、ただのヘンタイだなと思えた。貴族の考えることはわからない。メダルが手渡しでなくてよかった、とチェンファは安堵(あんど)している。そう長時間、笑いの衝動を抑える自信はなかったから。

「チェンファ・ザイツェン、頂戴(ちょうだい)します」

発音が少し訛ってしまったその姓の語源は、今はもう廃れてしまった先祖の言葉。再見(ツァイツェン)。

その話を誰かにしたのは、六年前、地球府の修学旅行に参加したときだけ。聞かせた相手もひとりだけ。

――再び見(まみ)えましょ、トバツ。

＜“See you again! － 再見！”―― 了＞